

日本人の他界観

宮坂宥洪

1. はじめに

筆者の地元では葬儀の際に地区の代表者が必ず弔辞を読む。筆者の知る限り、これは近隣の市町村でも他の地域でもほとんど例のない慣わしである。なぜこうした慣わしが生まれたかという点、昭和四〇年代頃に始まった冠婚葬祭を簡素にする「生活改善」と称する運動の一環として、この地域では香典返しを廃止する申し合わせがなされた。その際に、香典返しをしないかわりに公共の各種団体に故人の遺志金として寄付をすることにしたのである。これをうけて市や区や町内会をはじめ、各地区の老人クラブや壮年会や婦人会や社会福祉協議会や消防団などの各種団体では慶弔規定を設けて、遺志金をいただいた場合は原則として弔辞を捧げることにした。これに故人が所属していた趣味の団体や喪主の関係している諸団体を加えたいへんな数になる。その結果、当初は各種団体が次々に延々と弔辞を読み上げるといふ異様な光景が現出した。近年はそれがおさまって、地区の代表者が各種団体の代表として弔辞を読むようになったというわけである。

弔辞の内容は時候の挨拶に始まり、故人の来歴や家族構成や近況などに言及し、地域社会への貢献や人柄を称えて、遺志金の御礼を述べたうえで冥福を祈る言葉で締め括られる。常に必ずこうした弔辞が捧げられる以上、司会が故人の紹介をしたり、導師が諷誦文の中で故人の来歴等を述べたりする必要はまったくないのである。それはともかく、問題は最後の冥福を祈る言葉である。多くの場合、近代医学の粋を尽くして看病にあたったが、ついに「幽冥境を異にするに至った」とし、この上は「どうか安らかに昇天せられて」「天国よりご遺族の前途をお見守り下さい」と続く。

最近孫による「お別れの言葉」というのが結構あり、それは弔辞のように読み上げる場合も、祭壇に向かって語りかける場合もあるのだが、ほぼ例外なくその中に「天国」という言葉が登場する。祖父母に対する感謝の言葉に続いて、「天国から僕たち（私たち）を見守っていてね」というのである。

ごく最近の例であるが、「いつかまた会える日まで、さようなら」と述べた孫がいた。祖父母は死んで消滅したのではなく、「天国へ行った」のであり、そこに孫たる自分もいつかは行くのであり、ゆえにいつかまた会える日が来る。その日まで、さようなら、という。だが、こうした言葉を聞いて、なんと奇妙なことをいうものかと思う参列者は多分ひとりもない。

歴代の各地区の代表者が弔辞を書くにあたって特に互いに申し合わせた形跡もないし、それぞれの葬儀における孫たちの「お別れの言葉」を誰かが常に指図しているはずもない。そこで、この弔辞なり「お別れの言葉」の中に日本人の他界観がごく自然な形で現れていると考えられるのである。

2. 天国とは何か、どこをさす言葉なのか？

我々僧侶仲間は大抵この「天国」という言葉を聞いて苦々しい思いをする。仏式の葬儀の中でキリスト教式に「天国」などと言ってもらっては困るというわけである。仏教の世界観にも六道輪廻の一つとして「天界」はある。だが、僧侶の方々にとっても一般の方々にとっても、六道輪廻の「天界」は想定外であろう。一般的に「天国」とはまぎれもなくキリスト教の用語である。だが、キリスト教の用語としての天国は、日本人が想像している天国とは全然違うということは案外知られていない。

ここで結論を先取りしてしまうと、多くの日本人にとって「天国」は、いわゆる「あの世」と同義である。だから、日本人が日本人なりに（つまり「あの世」の意味で）「天国」という言葉を使っても全然問題ないのである。僧侶の方々が目くじらを立てるほどのことではない。聖書のどこにも人は死んで天国に行くとは書かれていない。キリスト教の「天国」は「あの世」ではないのである。

何であれ他界観のない宗教はない。「死後の世界」に関する考え方も宗教なり民族によって実に多様である。長い歴史の中で日本人が育み、信じてきた「死後の世界」は、後述するように日本列島に固有のものであるといえよう。それを日本人は「黄泉」「常世」と呼び、今では「天国」と呼んでいるだけのことである。仏教の用語で「極楽」「浄土」「彼岸」と呼ぶ人もいるが、実は同じことである。僧侶の方が「天国は浄土ではありません」と力説してもだれも納得していない。たしかに仏教で説く浄土とキリスト教でいう天国とは似て非なるものである。だが、キリスト教では、そもそもどこをさして天国と呼んでいるのかということについて、僧侶の方々も含めてほとんどの日本人はよく理解していないように思われる。天国というくらいだから漠然と天空にあるだろう

と考える人もいるかもしれないが、むろん空の上の成層圏のようなところに天国があるわけではない。天国とはどこか。

西欧イタリア文学の最大の古典といわれるダンテの『神曲』には、死者が赴く地獄・煉獄・天国が詳細に描出されているが、これはあくまでもキリスト教を題材とした文学作品にすぎず、キリスト教の世界観として公認されたものではない。殊に東方キリスト教圏（正教会・東方諸教会）においてはキリスト教の世界観に反するものとしてまったく評価されていない。

聖書にはたしかに「天国」に関する記述は多々あるが、そこは通常の間人が知りうるところでも行けるところでもなく、まして死者が行くところではない。一般にキリスト教徒が理想郷として考えている「天国」とは、「新しいエルサレム」と呼ばれる永遠の都のことである。それが実現すると、それまでの古い世（現実世界）と古い天（神の玉座のある世界）は滅び去り、もはや死もなく、悲しみや苦しみのないその新しい天国で神に祝福された人々だけが神と共に永遠に生き続ける。⁽³⁾

いつか超越的な唯一絶対の神が被造物たるすべての人間に「最後の審判」を下す日が来る。それがいつかは誰にも分からないが、その日は必ず来る、というのがキリスト教の根本教義である。

そのとき、イエスが復活する。これこそキリスト教の根本中の根本の教義である。イエスが復活するというのは、イエスの魂が誰か別人に転生するというようなことではない。今から約二千年前に磔刑にあつた神の子（と信じられている）イエスが生身の元の姿のまま、キリスト（救世主メシア）として降臨するのである。これがキリスト教の要諦である。

仏陀の教えを尊び信じ、あるいはその教えにしたがって生きるのが仏教徒であるように、イエスという人物が

説いた教えを尊び信じ、あるいはその教えにしたがつて生きるのがキリスト教徒であるかというところでは全然ない。仏教において「仏説」というのは絶対的に重要であるが、キリスト教においてはイエスが何を説いたかではなく（それが重要ではないという意味ではないが、絶対的に重要というわけではなく）、やがて復活するイエスを神の子として信じていることができるかどうか、基本的にはそれだけが純粹にして真摯なるキリスト教徒たりうる必要かつ十分な条件である。

いつの日か、イエスがキリスト（救世主Ⅱメシア）として蘇ると、忽然として神の国が到来するのである。これが肝心である。イエスが蘇った日に、この世が天国になるのである。これがキリスト教における天国である。イエスが蘇り、最後の審判をするために、神が降り立ったこの世が、神の国、すなわち天国になるのである。

このように、キリスト教における天国とは、いつの日か神がイエスを伴って降り立つこの世のことである。今現在この瞬間（少なくとも筆者がこの原稿を書いている時点）において、まだ天国は実現していない。キリスト教でいう天国とはそういう世界のことである。日本人が漠然と「あの世」のイメージで考えている世界とまるで異なるのである。

聖書によれば、この世に神が降り立ち、最後の審判が行われるとき、生きている人だけでなく、それまで死んだ人たちもすべて裁かれる。かくて死者たちは皆、墓場からむくむくと蘇るのである。これほど不気味なことがあるだろうかという話だが、キリスト教では、最後の審判を受けるために死者は生前の肉体のままに復活するのである。⁽⁴⁾ そのためにキリスト教徒は火葬を嫌い、生前の姿をできるだけ美しく保つ形で埋葬するのが原則である。

その審判の結果、どうなるかというところ、すべての人は、神の国たる天国で生きるか、もしくは永遠の罰を受ける⁽⁵⁾。天国とは神の国と化した「この世」にほかならない。一方、神に罰せられた者は地獄に落とされる。聖書に

おいて地獄は「火の池」「燃え盛る炬」などと記されている。⁽⁶⁾

いずれにしてもそれは「終末の日」を迎えてからの話である。死者はそれまでひたすら眠り続けるのみであり、その意味で死後の世界としての「あの世」というのはキリスト教にはない。

3. イスラム教の場合

イスラム教はユダヤ教・キリスト教と同一の神を別名で崇める宗教であるから、それらと同様、いつの日か最後の審判の日がくることになっている。

その時、アッラーなる唯一絶対神が裁判をするのだが、イスラム教の天国⁽⁷⁾とは、端的に言って男性中心の酒池肉林の世界である。緑豊かな果樹園のような楽園には、澄み切った川、腐ることのないミルクの川、いくら飲んでも酔いつぶれることのない美酒の川が流れていて、清らかな永遠の乙女が何人でも伴侶として得られる。そして二度と死の苦しみを味わうことはない。

一方の地獄⁽⁸⁾はキリスト教と同様に、永劫の灼熱地獄である。仏教のように、釈迦の慈悲による「蜘蛛の糸」が垂れることは方が一にもない。「地獄で仏」とか「地獄の沙汰も金次第」のような気楽なことわざが生まれる余地は皆無である。

ここで重要なことは、天国にしても地獄にしても、魂が行くのではなく、蘇って永遠の生を得た肉体が行くのである。未来永劫、肉体が天国で最高の快樂を得るか、それとも地獄で間断なき灼熱の苦痛を甘受するか。あなたは死後どちらを望むかと問われれば、きっと選択の余地はないであろう。この意味でイスラム教徒に迷いはない。イスラムとは「神に対する絶対的帰依」という意味だが、これが神の御心に適うと信じたら、結局のところ

イスラム教徒は何事にも躊躇しない。

イスラム教においてもキリスト教と同様に、天国にしても地獄にしても人が死んでただちに行くところではない。死者は「終末の日」を迎えるまでやはりひたすら眠り続けるわけである。日本人が当然のように考えている「あの世」は、キリスト教にもイスラム教にも存在しないのである。

4. インドの場合

インドのガンジス河畔には、「死を待つ人々の小屋」がある。

ガンジス河畔の聖地ヴァラナシにはインド全土から自らの死期を悟った人たちが訪れる。手にするルビー紙幣は自らの火葬代である。とりあえずは安宿に泊まり、いよいよ死期が近づくと、ガンジス河畔の火葬場の傍らにある小屋に赴く。そこで死を迎える。

火葬場といっても、平たくしつらえた場所があるだけで、屋根も囲いも何もない。柴を積み上げて茶毘に付し、遺灰は聖なるガンジス河に流される。それだけである。

かれらは一体どのような覚悟で自らの死を待ち、自らの火葬の順番を待っているのであろうか。

今生きている人が、自らが死ぬ場所を定めて身じろぎもせず（つまり病院にも行かず、医師の手当ても受けず）自らの火葬の順番を待つなどということは、まず日本人には考えられないことであろう。それがインドでは日常茶飯事に行われている。インド人にとって、そこはまぎれもなく自らの生の終焉の場所のはずなのだが、「死を待つ人々の小屋」はさほどの悲壮感が漂っているようでもない。そこはまるで駅のホームの待合所といった風情なのである。

かれらを乗り換えの列車を待つ乗客にたとえることは、決して的外れではない。それどころか、むしろ本望かもしれない。かれらにとって死とは、この世の寿命を終えた肉体を捨てて、魂がやがて新たな肉体を得るための節目にすぎない。自らの死を最後の終点と思わず、単なる一つの通過点と考える。確実にそう信じていればこそ従俗とした態度であり行動である。

あらゆる生命は永遠に生まれ変わり死に変わるといふ輪廻の思想が、インドでは今なお固く信じられている。これはインドで生まれたすべての宗教の根本にある。もちろん仏教もその例外ではない。

生まれる瞬間を「生有」という。生まれてから死ぬまでの生きている期間を「本有」という。臨終の瞬間を「死有」という。そして死んでから次の生を受けるまでの期間を「中有」（または「中陰」という。その期間は四十九日とされる。この四つの有、すなわち、生有・本有・死有・中有の「四有」の考え方は仏教にも受け継がれている。⁹⁾

死者は四十九日間の中有（中陰）を経て、次の生が定まる。何に生まれ変わるかは、前世の業（おこない）による。とにもかくにも必ず生まれ変わるのだから、あの世にとどまり続ける魂というものは存在しない。その意味で、インド人にとって「来世」はあるが、「あの世」は存在しない。

インド人は、この永劫の生死の繰り返しである輪廻を「苦」と捉えたのである。そしてこの輪廻の世界から脱出することを「解脱」と称し、それをあらゆる修行の究極の目標に置いた。釈尊は解脱を達成して仏陀となられた。解脱するとうなるか。二度と生まれ変わらぬ。この世界から完璧に消滅するのである。そうして涅槃を達成するのである。釈尊は二度と輪廻界に戻らないから再生はないというのが仏教の根本教義である。（なお、この根本教義を踏まえて輪廻界を超越した永遠の仏陀を想定するのが大乘仏教の立場である。）

このようにインド人は輪廻する世の中で永遠に生死を繰り返して、ともかく生き続けることを苦と捉え、そこから脱出（＝解脱）することを理想と考えた。これはまさにキリスト教徒の理想と正反対である。キリスト教では、いつか天国と化すこの世で「永遠の生」か「永遠の罰」かのいずれかが与えられる。インド人が苦と考える「永遠の生」がキリスト教徒にとっては究極の幸福と考えられているのである。（キリスト教の「永遠の罰」は「最後の審判」後の「天国」と化した「この世」からの完全消滅とも言えるから、それはもちろん仏教の涅槃とはまるで異なるものであるにせよ、両者の指向するところは正反対である。）

5. 四十九日忌の意味

日本の国に生まれ育った日本人ならば、なにがしかの縁で洗礼を受けたキリスト教徒であろうと、あるいはイスラム教徒になった人であろうと、これらの宗教の根本教義である「最後の審判」を心底から信じることはむずかしいのではないだろうか。同様に、世界の宗教分布図において「仏教国」に分類されている日本ではあるが、インドの輪廻思想を信じている人は少ないのではないだろうか。

現在、九割以上の日本人は仏式で葬儀を行い、また四十九日の「満中陰」の法事なども、ごく普通に行われている。『広辞苑』は「四十九日」という項目を設けて次のように説明している。

【四十九日】〔仏〕①人の死後四九日間のこと。前生までの報いが定まって次の生に生まれかわるまでの期間。俗にこの間死者の魂が迷っているとされる。中有。中陰。②人の死後四九日に当たる日、すなわち中陰の満ちる日。死後追善の最大の法要を営む。七七日。満中陰」

この①の説明は、インド仏教の「中有」の説明としては正しいが、②の説明とは矛盾する。日本において通常営まれている四十九日忌の仏式の追善法要において、例えば亡くなった祖父母や両親、あるいは妻や夫や子は、四十九日を経て「中陰が満ちる」ことによつて「次の生に生まれかわる」ことが決定し、さて今頃は牛か馬に生まれ変わっているだろうか、鳥に生まれ変わっているだろうか、もしかすると昆虫に生まれ変わっているかもしれないなど考える日本人は一人もいないであろう。だが、インドの輪廻思想とは、そのように信じていることなのである。

インド仏教と日本仏教は同じ仏教として当然のことながら似ているが、死生観に関して根本的に違う分岐点がある。この四十九日の解釈にあると思われる。

日本仏教では、四十九日という日数を「次の生に生まれ変わるまでの期間」ではなく、「浄土に往生するまでの期間」と考えているのである。すなわち「あの世」に到達するまでの期間である。

もしインド仏教における「中有」の意味で四十九日の法事を執り行うのだとしたら、その後の年回忌の供養や盆や彼岸などの追善法事は何の意味もなさないことになる。『広辞苑』の説明のように、四十九日が「前生までの報いが定まって次の生に生まれかわるまでの期間」にすぎないのならば、あの世にとどまり続ける魂というものは存在しないわけであるし、そもそもインド仏教において「あの世」などは存在しないのだから、「あの世」に逝つたとされる死者ないしは先祖に対する供養はまるで意味がないということになる。

従来、こうした日本仏教の考え方やしきたりは、インド仏教を逸脱しているから「本来の仏教ではない」として近代仏教学の研究者やそれに同調する識者から常に批判の対象となってきた。しかし、日本に伝来して根付いた仏教は、もはや日本人の宗教というべきではないだろうか。日本人の宗教がどうしてインド人の宗教と同じで

なければならぬだろう。「本来の仏教」が何ほどのものであるにせよ、そのインド仏教は、とうの昔に滅びてしまっているのではないか。

6. 浄土の意味

日本人は死後の世界を「浄土」と呼ぶ。これもインド仏教を大きく「逸脱している」といえる。なぜならば、そもそも「浄土」にあたるサンスクリット語はなく、それゆえ、これはインド仏教に由来する言葉ではないからである。中国で誕生した浄土教の用語である。「浄土」という言葉は『無量寿経』の中の「清浄国土」を約めたものである。本来は現実世界を清めて仏国土にする、つまり「土を浄める」という菩薩行のことをさし、どこかの場所をさす言葉ですらなかった。

そうして生まれた国土がある。つまり菩薩の誓願と修行によって建てられた国があり、それを仏国土という。大乘仏教では、十方の諸仏とそれぞれの仏が君臨する理想世界を説く。阿弥陀仏の西方世界はその一つの仏国土として想定されたものであった。

浄土三部経の『阿弥陀経』には、「これより西方十万億土を過ぎて世界あり、極楽という」と説き、『無量寿経』には法蔵菩薩がたてた四十八願を説き、『観無量寿経』には阿弥陀仏と極楽世界に関する十六観を説く。いずれも阿弥陀仏をたたえて極楽世界への往生を説く。ただ、そこは一種の（たくさんある中の一つの）理想郷であって、決して死者が無条件に赴くところではなかった。

浄土三部経が描き出す極楽とは、悟りの世界が実現した理想郷であって、死後の世界のことではなかったが、中国浄土教は、そこを死者の赴く理想郷とし、西方極楽浄土への往生を説いた。

法然と親鸞に代表される日本浄土教も、基本的には浄土三部経を所依の經典としているが、かれらは実はその所説には、まるでとらわれていない。法然は大胆にも『観無量寿経』などに説く觀想の念仏は方便の説であつて、「南無阿弥陀仏」と口で称える口称念仏こそが、釈迦、龍樹、世親、曇鸞などの真説であつたと主張した。日本浄土教の先駆者である源信の『往生要集』には、まだインド仏教の基本教理が踏まえられていた。それはすなわち、迷いの世界である六道輪廻の束縛を断ち切り、悟りの世界をめざすというもので、極楽世界を觀想する念仏（文字通りに「仏を念じる」）修行によつて仏国土へ往生できるといふ考えである。

ところが、法然は、そうした自力的な觀想の念仏は不要だと説いただけではなく、六道輪廻や解脱ということすら言わず、むしろそうしたインド思想はあつさり放逐し、「この世」から「あの世」へ赴くという単純この上ない明瞭な図式の中で、「南無阿弥陀仏」と口で称えさえすれば、だれでも阿弥陀仏に救われて往生できるとした。親鸞はさらに進んで、すべての人はすでに阿弥陀仏（その前身である法蔵菩薩の誓願の成就によつて生まれた仏）によつて救われているのだから、救いを求めて念仏するというのは誤りで、念仏とは私たちがすでに救われているということに対する報恩感謝の念仏でなければならぬと説いた。そして阿弥陀仏の力によつて浄土に至れば、いつまでもそこに留まっているのではなく、この世に何度も生まれ変わつて衆生済度に努めなければならぬとし、それこそが尊い菩薩行であるとした。

もはや、浄土に赴かない死者はいない。そして死者は浄土に往生した途端に、「仏国土の住民」という意味で「仏」と呼ばれることになる。日本以外の仏教国のみならずいかなる宗教の国であろうと、これほど死者を称えた呼称はない。すべての日本人は例外なく「死ねば仏」と呼ばれる。この呼称の起源がいつであろうと、死者を無条件に「ホトケ」と呼ぶようになった時点において、「日本仏教」が「インド仏教」と袂を分かつて、「日本の宗教」

として完成したと言えるのではないだろうか。

7. 日本人の「あの世」観

柳田國男や折口信夫が開拓した日本民俗学という学問は、わが国の民間の信仰や習俗を丹念に調査し、仏教色に染まる以前の日本の民間信仰を明らかにしようとしたものだが、現存する民間信仰の由来がどれほど古い時代にさかのぼれるものであるにしても、それを特定することはきわめて困難であり、しかもその多くが仏教と無関係とは決していえない。

日本古来の民間信仰は「日本仏教」として生き続けたと言っても決して過言ではない。柳田國男は終戦直後に公刊した有名な『先祖の話』という本の中で、昔から日本人の多数は死後の世界を、近く親しいものと考えていたと述べ、とりわけ日本的な特徴と言えるものを四つあげている¹⁰。

- ① 死してもこの国の中に霊は留まって、遠くには行かぬと思ったこと。
- ② 顕幽二界の交通が繁く、単に春秋の定期の祭だけでなしに、いずれか一方の心ざしによって、招き招かれることがさまで困難でないように思っていたこと。
- ③ 生人の今際の時の念願が死後には必ず達成できるものと思っていたこと。
- ④ これによって子孫のためにいろいろの計画を立てたのみか、さらに再び三度と生まれ変わって、同じ事業を続けられると思っていたこと。

死後の世界に対するこうした観念は、日本のどこかある地方に特有の民間信仰が徐々に全国に広まったというのではなく、日本列島のほぼ全域に渡って非常に古い時代から脈々と伝えられてきたものであろうと考えられている。その古さがどこまでさかのぼれるかは別として、少なくとも仏教という強力な世界宗教を受容し、外見上日本は古代とは違った仏教国になったはずであるのに、実はその仏教を日本にしかない「日本仏教」という独自の形態に仕上げてしまうほど根の深いものであった。

梅原猛氏は『日本人の「あの世」観』という本の中で、仏教移入以前、おそらくは弥生時代以前から日本に存在している「あの世」観を最も純粹な形で残しているものであろうとして、アイヌと沖繩に伝わる「あの世」観を四つの命題に集約できるとしている。^①

①あの世はこの世と全くアベコベの世界であるが、この世とあまり変わらない。あの世には、天国と地獄、あるいは天国と地獄の区別もなく、従って死後の審判もない。

②人が死ぬと魂は肉体を離れて、あの世に行つて神になる。従つて、ほとんどすべての人間は、死後あの世に行き、あの世で待つている先祖の霊と一緒に暮らす。大変悪いことをした人間とか、この世に深い恨みを残している人間は、直ちにあの世に行けないが、遺族が霊能者を呼んで供養すれば、あの世に行ける。

③人間ばかりか、すべての生きるものには魂があり、死ねばその魂は肉体を離れてあの世に行ける。特に、人間にとって大切な生き物は丁重にあの世に送られねばならない。

④あの世でしばらく滞在した魂は、やがてこの世に帰ってくる。誕生とは、あの世の魂の再生にすぎない。このようにして、人間はおろか、すべての生きとし生けるものは、永遠の生死を繰り返す。

以上の命題にはそれぞれ説明が要るが、大方の日本人には見当がつく内容だと思われるので、ここでは省く。興味深いことは、このアイヌ・沖繩の「あの世」観は、柳田國男がまとめた日本人の死後の世界観とほとんど同一の基調であるという点である。また現代の日本人も、その意識の底に同様の世界観を漠然とではあるにしても持っているのとみて差し支えない。それはどのような世界観なのかと改めて問いただしても明確に答えられないかもしれないが、前述のキリスト教やイスラム教の終末論と最後の審判の考え方、あるいはインドの輪廻思想に心底から同調することのできる人は少ないだろう。それに比して圧倒的に大多数の人は上述の日本人の他界観には必ずや思い当たる節があるにちがいない。

あの世は浄土や彼岸と呼ばれようと、あるいは常世や黄泉の国と呼ばれようと、決して十万億土という途方もなく遠いところにあるのではなく、また浄土三部経が描き出すような金銀寶石で飾られた豪華絢爛たる世界ではなく、むしろこの世とあまり変わりなく、目には見えないけれども、せいぜい近くの山の向こうあたりであつて、そこは先に逝つた人たちが待っていて、いつでも子孫を見守つてやれる見通しのよいところである。子孫の願いや苦勞や悲しみも聞き届けてくれて、苦樂を共にしてくれ、願えば力も貸してくれる。この世を旅する人たちがいつかは必ず帰る場所であり、究極の安らぎが得られる「いのちのふるさと」である。

詠み人知らずではあるが、真言宗の教化において最も重んじられてきた古歌の一つ、「阿字の子が 阿字のふるさと立ち出でて また立ち返る 阿字のふるさと」は、こうした日本人の古来の死生観を密教の用語で巧みに表現した秀歌といえよう。

8. 結語

日本人の他界観は単純この上ない。人は「この世」に生まれ育ち生きて、いつか必ず「あの世」へ行く。つまるところ、「この世」と「あの世」しかない。そして、「あの世」は「この世」とほとんど変わりがなところだと考えられている。

キリスト教やイスラム教に説く最後の審判のようなものはない。古代エジプトの『死者の書』のごとく、死者が楽園に行くために、死者の心臓を真実の羽根と天秤にかけるといった裁判などもない。その結果としての快樂三昧の天国もなければ、灼熱の責め苦の地獄もない。唯物論的に一切が無になるという考えもない。

今なおインドやチベットなどにおいて信じられているように、前世の業の結果として、死後四十九日を経て否応なく、必ず牛か昆虫か亀などに生まれ変わると思っている日本人は一人もいない。だが、この輪廻の思想を大前提として、輪廻の苦の脱却を目指したのが本来のインド仏教なのである。

日本人は仏教の受容に伴い、輪廻という言葉を知り、その意味を理解した。人は死ねばおしまいというようなものではなく、なにもかも無に帰するのではなく、生死は繰り返すのである。平安時代初期に書かれた日本最古の説話集『日本霊異記』は、善悪は必ず報いをもたらし、その報いは現世だけでなく来世で被ることも、地獄で受けることもあるという教訓の例話を多く載せるが、これはインド仏教の輪廻思想をしかと踏まえたものである。しかしながら、輪廻思想はいつしか日本において原形をとどめないほどに改変されるに至った。ほとんどの日本人にとって六道輪廻は単なる絵物語である。

あの世はどこにあり、どういうところかと問うならば、多くの日本人が抱いているのは、懐かしいふるさとの

イメージである。そこはまさしく命の源郷である。現世を生きる我々はみな旅人である。その彼方の世界を現代の日本人の多くは天国を呼んでいるにすぎない。キリスト教の用法とは無関係に、この言葉に日本人に特有の他界観がまごうかたなく込められている。

註

(1) 神曲は「地獄篇」「煉獄篇」「天国篇」の三部構成で、各部

はそれぞれ三十三曲、総序一曲を含め百曲、全一万四二三行の韻文による長編叙事詩である。ダンテが生涯をかけて愛した「永遠の淑女」ベアトリーチェが死後に地獄にいるローマ時代の詩人ウエルギリウスをダンテのもとに送り、地獄・煉獄・天国へと案内させる筋立てになっている。

(2) 例えば『イザヤ書』六章「ウジヤ王が死んだ年のことである。

わたしは高く天にある御座に主が座しておられるのを見た(以下略)」。このほか『エゼキエル書』一章、『ダニエル書』七章九節～十節、『コリントの信徒の手紙二』十二章一節～四節、『ヨハネの黙示録』一章四節～五節など。

(3) 「更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のため

に着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下ってくるのを見た。そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。見よ、神の幕屋が人の間に

あって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神はみずから人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってください。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のもは過ぎ去ったからである」(『ヨハネの黙示録』二十一章二節～四節)。

(4) 「驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞き、善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出てくるのだ」(『ヨハネによる福音書』五章二八節～二九節)。

(5) 「多くの者が地の塵の中の眠りから目覚める。ある者は永遠の生命に入り、ある者は永久に続く恥と憎悪の的となる。目覚めた人々は天空の光りのように輝き、多くの者の救いとなった人々はとこしえに星と輝く」(『ダニエル書』十二章二節～三節)。「こうして、この者どもは永遠の罰を受け、

正しい人たちは永遠の命にあずかるのである」(『マタイによる福音書』二五章四六節)。「天使たちが来て、正しい人々の中にいる悪い者どもをより分け、燃え盛る炉の中に投げ

込むのである。悪い者どもは、そこで泣きわめいて歯ざしりするだろう」(『マタイによる福音書』十三章四九節〜五〇節)。「聖なる天使たちと子羊の前で、火と硫黄で苦しめられることになる。その苦しみの煙は、世々限りなく立ち上り、獣とその像を拜む者たち、また、だれでも獣の名の刻印を受ける者は、昼も夜も安らぐことはない。ここに、神の掟を守り、イエスに対する信仰を守り続ける聖なる者たちの忍耐が必要である」(『ヨハネの黙示録』十四章一〇節〜十二節)。

(6) 「毒麦が集められて火で焼かれるように、世の終わりにともそうなるのだ。人の子は天使達を遣わし、つまずきとなるものすべてと不法を行う者どもを自分の国から集めさせ、燃え盛る炉の中に投げ込ませるのである。そこで泣きわめいて歯ざしりするだろう。そのとき、正しい人々はその父の国で太陽のように輝く」(『マタイによる福音書』十三章四〇節〜四三節)。

(7) 「以上は(アツラーの)お論じゃ。要するに敬虔な信者の行きつく先は素晴らしいものよ。何しろアドン(エデン)の楽園だからな。門という門は全部彼らに開け放たれ、その中ではみんなゆったりと身を凭せて、沢山の果物、うまい飲物、なんでもお望み放題。側に待てるは眼差ういういしい乙女らで、年齢も丁度頃合いじゃ。『さあ、これこそ、お前たちが決算日に戴くはずになっていたもの。これこそ尽き

ることなき我ら(アツラー)の糧食。』」(『コーラン』下・井筒俊彦訳・岩波文庫五三頁〜第三三章四九節〜五十四節)。「だが、生意気な奴らの行きつく先となると、さあ大変だぞ。何しろジャハンナム(ゲヘナ)で丸焼きになるんだもの。いや、まったく、とんでもない揺籃もあつたものさね。とまあ、こんな具合さ。ともかく、とっくり味わって戴きたいよ。煮えたぎる熱湯にどろどろの膿、その他これに類するいろいろな(責苦)を取りまぜてな」(前掲書五三〜五四頁〜三十八章五節〜五八節)。

(9) 『俱舍論』九(大正藏二九卷、四六頁以下)。

(10) 柳田國男『先祖の話』(ちくま文庫「柳田國男全集」一三、一九九〇年、一六六頁)。

(11) 梅原猛『日本人の「あの世」観』(中公文庫、一九九三年、二一〜二三頁)。

〈キーワード〉天国 浄土 あの世